朝焼けにラストステージ

作 入江おろぱ

柊都　　真面目なリーダー
ＴＯＡ（とあ）　ダンススクール出身
ちゅみ　　アイドル志望
デン　　バラエティー担当
カッツ　　結成メンバー

朝焼けヘブン　通称ヘブン。男女混合５人組ダンス＆ボーカルグループ。
　５０年前は男性だけのグループだった。

５つのパイプ椅子が乱雑に置いてある。その１つに『朝焼けにラストステージ』と書かれた（額縁）が置いてある。
カンカンカンと、ステージ設営をしている音が外から響く。
ここは野外フェス会場にある簡易的な楽屋。『おまえと朝焼け』（作曲：hoto_D 作詞：入江おろぱ）がかかる。
カッツが指パチを鳴らしながら歩いてきて、前奏で踊る。
柊都が入ってきて、カバンを（額縁）の椅子に置く（皆ここに）。
カッツは出て行く。

ちゅみ「（来て）♪おはようございまーす。わーぁ、柊都さんはやいですね」
柊都　「おうおはよう」
ちゅみ「ちゅみちゅみ、フェス初めてです！ 超楽しみ～」
柊都　「そっか。女子たち加入してまだ半年だもんな」

ＴＯＡがアクビをしながら入って来る。

ＴＯＡ「（ふあー）おはよ」
ちゅみ「ＴＯＡちゃんおはよう！」

ＴＯＡ「んー。外、まだ暗いし。ホントにお客さんなんて来んの？」
柊都　「伝統ある野外フェスなんだから大丈夫だろ。そのトップバッターを俺たち〝朝焼けヘブン〟が勤めるんだ」
ちゅみ「大役です～」
ＴＯＡ「『フジロック』とか『サマソニ』ならわかるけど、『山と自然フェスティバル』って。　なにそれ」
ちゅみ「確かに聞いたことないですよね。そもそも山と自然って同じでは？」
柊都　「今年で２５回目らしい」
ＴＯＡ「へえ…こんな山奥で毎年やってんだ。でもさ、ちゅみちゅみ、虫とか出そうじゃない？」
ちゅみ「うえ～」
デン　「（入って来て）虫は変温動物。気温の低い早朝はほとんど活動しない」
ＴＯＡ「デンちゃん」
ちゅみ「おはようございまーす」
デン　「おはようございマルセイバターサンド！は六花亭！！」（など持ちギャグ）
ＴＯＡ「なにそれ」
ちゅみ「北海道のお土産、知らない？」
柊都　「一発ギャグっていうか、もはやＣＭだろ」（など）
デン　「みんなはやいな」
柊都　「バスも出してくれないから、自分で前乗りするしかないからね。現地集合のアイドルなんて、俺たちぐらいじゃないか」
ＴＯＡ「アイドルじゃない。ダンス＆ボーカルグループ」
柊都　「あ」
デン　「そこ間違えんなよ」
ＴＯＡ「もお」
柊都　「わるいわるい」
ＴＯＡ「コンセプト会議やった意味ないよ」
ちゅみ「アイドルグループ…」
デン　「リーダーなんだから」
ちゅみ「…ダンス＆ボーカルグループ…」
柊都　「どした、ちゅみちゅみ」
ちゅみ「…うーん…歌って踊るのが仕事でしょ？　それって結局（一緒）」
ＴＯＡ「ちがう。ダンス＆ボーカルグループは音楽性があるの」
デン　「本格的なパフォーマーがいる」
柊都　「アイドルはステージ以外にもバラエティーとか芝居とかをやるだろ」

ちゅみ「え、ダンス&ボーカルグループの人がバラエティー番組のMCやってるけど」
一同　「……」
ちゅみ「そうだ、この前観た映画、主役はダンス&ボー…」
TOA「それは」

一同、TOAを見る

ちゅみ「それは？」
TOA「(開き直って) それは、それ！」

カッツが笑いながら入って来る。

柊都　「カッツさん」
ちゅみ「おはようございます！」
一同口々に「おはようございます」
カッツ「おはようございます。ちゅみちゅみちゃんはアイドルのがいいもんな？」
ちゅみちゅみ「はい！」
カッツ「TOAちゃんは、歌とダンスで勝負したい」
TOA「ええ、私は個性のあるグループで勝負したいんです。一番イメージの近い言葉が本格ダンス&ボーカルグループです」
カッツ「うんうん。だったらいまの時代、色分けする必要もないんじゃないか、リーダー」
柊都　「でもヘブンのデビューは1975年ですよね。それから50年、公には一度もアイドルを名乗ってないじゃないですか」
カッツ「そうしなきゃいけなかったからな」
ちゅみ「いけなかった？」
カッツ「50年前、僕は男性3人組〝朝焼けヘブン〟でデビューした。当時はね、一社をのぞいて男性アイドルグループを名乗っちゃいけなかったんだよ」
デン　「テレビ局も映画会社も、舞台を作ってる制作会社も示し合わせて、言ってみたらシステムみたいになっていったんですよね」
カッツ「だから、そこを怒らせないように言い訳を作っておかなきゃ、僕たちはどこにも使って貰えなかった」
TOA「その言い訳が、ダンス&ボーカルグループ」

カッツ「ＴＯＡちゃん、その頃はまだそんな言葉ないよ。のちのち、同じ立場の人たちが一生懸命考えたんだろうね」
ＴＯＡ「なるほど」
カッツ「当時のプロデューサーが頑張ってくれて、デビュー曲はそこそこヒットした。まだレコードとかカセットテープの時代だよ。レコードショップとかスナックなんかに手売りに行ってね」
ちゅみ「それがレコ大新人賞に輝いた、『おまえと朝焼け』ですね！」
カッツ「ああ。それから…やっぱり徐々に失速して、５０年いろいろあった。メンバーがどんどん入れ替わったり」
柊都　「レコード会社から契約を切られたり」
ＴＯＡ「事務所が倒産したり」
デン　「元メンバーが捕まったり」
ちゅみ「３度も離婚したり」
カッツ「そいつは僕のプライベート」

一同、笑う。

カッツ「潜って潜って潜ったきり５０年。僕は卒業せず、こうやって〝朝焼けヘブン〟は形を変えながら続いている」
柊都　「カッツさんのおかげです」

カッツ、指を鳴らす。

カッツ「今日はみんなに話があるんだ」
柊都　「あらたまってなんです？」
カッツ「うん、聞いてくれ。今日のステージで〝朝焼けヘブン〟を解散しよう」

一同、ストップモーション。
『おまえと朝焼け』がかかる。指を鳴らしながらカッツが出て行く。
４人で円座になって緊急会議がはじまる。

デン　「…本気かな？」
柊都　「……」
ちゅみ「うん」
ＴＯＡ「目がガチだった」
デン　「でも、でもよ、二人が入ってまだ数か月だろ」

ＴＯＡ「ちょうど半年ぐらい？」
ちゅみ「（涙ぐんで）ぅん…」
ＴＯＡ「私たちも入れて、グローバルにやっていこうって、カッツさんが言い出したんですよね？」
柊都「……」
デン「リーダー、なんか聞いてたか？」
柊都「……」
ＴＯＡ「リーダー？」
柊都「…いや聞いてない。そんな素振り、全然」
デン「じゃなんで…！」

イライラするデン、ぐじゅぐじゅ泣いてるちゅみにＴＯＡが寄り添う。重たい空気。

ちゅみ「…ちゅみちゅみね、ずっと憧れてるガールズアイドルがいるの。会いたい、とか、近づきたい、とかそんな気持ちじゃなくて、推したちの見ている景色がどんなものなのか知りたくて。私なんかときっと全然違うんだろうってずっと想像してて。もし、もし一度でも同じステージに立てたら、自分も少しは変われるのかなって。そんな風に思って、それで……」
柊都「そっか、それで経験なしでオーディションに」
ちゅみ「このフェスには出てないけど、活動続けてたらいつかきっと…そう思ってた」
ＴＯＡ「頑張ろうよ」
ちゅみ「でも」
ＴＯＡ「〝朝焼けヘブン〟だけがグループじゃない。解散するなら別の」
ちゅみ「無理だよ。ダンスも歌も私、ＴＯＡちゃんみたいに上手くないし才能ない」
ＴＯＡ「私だってないよ。スクールじゃ毎日居残りで練習したけど、結局研修生からデビューさせて貰えなかったし。オーディションで自分から蹴ったって言ったけど、それはそれ。だって、課題曲もダンスも一番私に向いてないジャンルだった。なんてツイてないって思ったけど、それでも必死に練習した。友達の誘いも断って、声枯れても熱出てもレッスン行った。足の裏の血豆、何回潰したかわかんない。選ばれなかったけど、これだけは言える。私は負けてない」
ちゅみ「ＴＯＡちゃん」

ＴＯＡ「絶対にステージに立ち続ける。だって表現することが好きだから」
一同「……」

デン、（額縁）の椅子を調べたり、あたりをキョロキョロ。

柊都「なにやってんだ、デン」
デン「いや、どこかにさカメラが隠してあんのかと」
ＴＯＡ「え、カメラ？」
デン「ああ、俺わかっちゃった。これさ、ドッキリなんだよ」
ちゅみ「ドッキリ？」
デン「テレビとかユーチューブでよく芸人がやってるだろ、解散ドッキリ。だいたいこういうところに」

ＴＯＡ、しゃがみこんでるデンのヅラを掴んで取る。

ＴＯＡ「わたしらは芸人じゃない！」
デン「ちょっあっあっ…！」
ちゅみ「現実逃避しないでください」
柊都「カッツさんは、飄々としていい加減なとこもあるけど、芸事でふざけたりはしない」
ちゅみ「デンちゃんサイテーです」

しょんぼりしたデン。ＴＯＡにヅラを戻され、カバンにしまう。

柊都「今日で解散…なんか信じらんないけど、もしそうなったらどうする？」
ＴＯＡ「私は、入りたいグループを見つけてオーディションを受ける。本当言うと、いまはインディーズのヘブンに入ったこと、ちょっと後悔してたんだ。だから、これをステップアップだと思ってメジャーデビューを目指します」
ちゅみ「私はまだ考えられないです。ヘブンが好きだから、納得いくまで頑張ろうって思ってたから」
柊都「ゆっくり考えればいいよ。俺は……どうしようかな。辞めた後のこと、考えてなかったわけじゃないんだけど、いざこうなってみると」
ＴＯＡ「リーダー、入って何年でしたっけ？」
柊都「来年で１０年、それまではって思ってたから。グループ活動してない自分を想像できないな」

デン　「リーダーはヘブンに全てを注ぎ込んでた。それは、そばで見てた自分が一番よく知ってる」
柊都　「デン、おまえ」
デン　「パフォーマーもプロデュースも両方やって、少しでもファンを増やそうと、ずーっと努力してた。この体型を維持してるのもすごい。俺なんか15キロ太った」
柊都　「おまえ…」
デン　「(握手を求める)」
柊都　「取り返そうと思って！」
ＴＯＡ「カッコ悪ー」
ちゅみ「サイテーです」
デン　「うんちゅみちゅみ二回もサイテーだすな、な？」

スタッフの声「〝朝焼けにヘブン〟さーん、客入れはじめまーす」
一同　「はーい！」「宜しくお願いしまーす」など口々に

デン　「あーあ、これがラストステージか」
ＴＯＡ「こんな朝早く、お客さんも全然いないフェスがラストステージ」
ちゅみ「ヘブンっぽいですけどね」
柊都　「でもさ、デンは地元だろ？ 両親も来てるんだから、いいじゃんか」
ＴＯＡ「え、そうなの？ これ、デンちゃんの凱旋公演？」
デン　「実は…嫁と娘も呼んでる。今朝は実家から来た」
ちゅみ「結婚してたんだ…」
ＴＯＡ「へー、なんで隠してたの？」
デン　「そりゃファンには夢を見せないと。ステージの上では現実とか生活とか、必要ない」
ちゅみ「うん知りたくないもんね、推しのリアルな姿」
デン　「佐藤健がアパートに住んでたらガッカリだろ？」
ＴＯＡ「ま、住んでないと思うけど」
柊都　「俺たちがやることは結局、日常の反対なんだよな。ステージが大きかろうが、小さかろうが関係ない。昨日エゴサしてて、看護師さんのポストを見つけたんだ。その人は深夜バスに乗って、今日のフェスを観に来てくれる。仕事が辛くても他に人がいないから、頼まれて夜勤が四日連続になった、昼のバイトもあるからほとんど寝れない、最悪だって。それでも、俺たちに会えるからなんとか頑張れる、そう書いてた」

一同　「……」

カッツが入ってきて気付かれずに見ている。

柊都　「カッツさんのファンは、子育てが終わって、時間と少しの余裕ができたマダムが多いんだって。更年期になった自分の体のこと、夫のこと、親のこと、仕事のこと、そんな日々考えなきゃいけないことを一瞬でも忘れて、自分を解放しに来る。その手助けが、この仕事だって言ってた。だからどんな理由があろうと、俺たちが休んだり、手を抜いたりしてはいけない」

ちゅみ「…ちゅみちゅみたちが夢を見てるように、お客さんも夢を見てるってことか」

柊都　「〝朝焼けヘブン〟は、年齢も性別も出身も、目標だってバラバラだ。それでも1つのグループになって、お客さんと向き合ってきた。半年ぐらいのメンバーもいるけど、時間は関係ない。ありがとう」

柊都、頭を下げる。

一同　「……」

カッツ「僕からも言わせて下さい。皆さん、本当にありがとう」

ちゅみ「カッツさん」

ＴＯＡ「いつからそこに？」

カッツ「(微笑んでいる)」

柊都　「恥ずかしいとこ見られちゃいました」

カッツ「話し合いは終わったね？」

柊都　「ええ」

ＴＯＡ「カッツさんが決めたことに異論はありません」

ちゅみ「私も」

デン　「ヘブンは最初からいるカッツさんのグループです」

柊都　「残念ではありますけど、俺らはカッツさんの想いを尊重します」

カッツ「……グループの名前を残したいなら、僕が卒業して、みんなが継いでいったらいいとも思った。結成メンバーが一人も残ってないグループなんてたくさんあるだろ。でも、最後の我儘を言わせてほしい。〝朝焼けヘブン〟を自分と道連れにしたいんだ。僕は…認知症が進んでる。まだ軽度だけど、この病気はいつどうなるか分からない。パフォーマンスが落ちるなら、ステージに立つ資格はない」

ちゅみ「認知症…」
柊都　「いつ、わかったんですか？」
カッツ「先週、検査の結果が出たんだ。５０年、ピンチばっかりだったけど、今回は「はい、お疲れさん」そう言われた気がしたよ。芸事の神様にね」
一同　「……」
ＴＯＡ「カッツさんのステージパフォーマンス、好きです。新しいことに挑戦する姿勢も。このグループに入って良かった、いまそう思ってます」
カッツ「ＴＯＡちゃん…ありがとうございます。まあ、好きな人生を生きました。いま考えると、あっちの道を選んだらどうなってたんだろうと思うことはあります。誰でもそうだと思うけど、選ばなかった人生は魅力的に見えるもんです。でも、そんなのわかんないわけです。こんぐらいになっただろう、とか全部推測ですから。それも、いまの自分を生きてきて、経験した感覚をもとにしたものでしょう。比べることも、良かった悪かったって思い返すことも、本当は意味が無いんですよ。自己満足したいだけです」

一同、頷く。

柊都　「そろそろ時間ですね」
デン　「円陣を組もうぜ」
ちゅみ「はい！」
ＴＯＡ「（輪になって）カッツさん、ここ」
カッツ「ありがとう」

柊都、手を出すが引っ込める。

柊都　「カッツさん、一言もらえますか？」
カッツ「ええ。最後のステージです。いつも通り、全力を出しましょう」
一同　「はい！」
柊都　「よし、行くぞ（手を出す）僕たちのステージで、全員ヘブンへ連れていきましょう！」
一同　「おお！」
柊都　「朝焼け」
一同　「ヘブーン！」

一斉に手をあげる。

ちゅみ「あ！あれ、見てください！」
デン　「ええ？」
ＴＯＡ「なに？…あっ」
ちゅみ「きれいな朝焼け」

５人はそれぞれ万感の想いで朝焼けの空を見上げる。
『おまえと朝焼け』がかかり、５人でパフォーマンスする。

おわり